

杉本淑彦著

『文明の帝国——ジュール・ヴェルヌと
フランス帝國主義文化——』

平野千果子

一、はじめに

ジュール・ヴェルヌといえは、冒險小説家、あるいは空想科学小説家として世界的に最も著名な作家の一人である。その作品は、これまでに八八言語に訳されてもいる。もちろんわれわれ日本人にも、きわめて馴染みの深い作家である。しかもヴェルヌは、日仏文化交流においても特筆すべき存在である。今日でこそフランス文学の翻訳は引きも切らないが、西洋の文物が盛んに取り入れられた明治初期において、文学としてのフランスの書物の邦訳第一号が、ヴェルヌの『八〇日間世界一周』だったからである。日本にとってヴェルヌは深い因縁がある作家と言えよう。

一九九五年に上梓された杉本淑彦氏の『文明の帝国——ジュール・ヴェルヌとフランス帝國主義文化——』は、ヴェルヌの小説を素材としてフランスの「帝國主義文化」を考察しようとする、野心的な試みである。近年、氏は第三共和政以降、主に第二次大

戦期以降現代にいたるまでの時代にわたって、フランスの「帝國意識」を検証するという仕事を精力的に発表してきた。今回の著作は一流行作家の作品を通して、第三共和政前期を中心に帝國意識の分析をめざすものである。

はじめに用語について整理しておこう。まず「帝國意識」とは著者も述べているように、わが国では木畑洋一氏の『支配の代償』（東京大学出版会、一九八七年）以来、植民地関連の研究で頻繁に用いられるようになった言葉である。これは本書では「膨大な公的資金の投入が必要となる帝國主義による植民地支配を宗主國國民が是認するにいたった心性」とされる。次いで「帝國主義文化」は「そのような心性を形成するべく植民地拡張論者が唱えた帝國主義イデオロギー、そしてそのイデオロギーを草の根國民レベルへ伝達する装置、の総体」と著者は定義している（本書一〇頁。以下、括弧内の頁数は本書の引用）。

ところで帝國主義のイデオロギーを伝達する装置は、同時に「帝國意識を映し出す鏡でもある」。それには新聞・雑誌の類や教育の場や万博といったイベントなど、様々な媒体があげられる。本書でそうした素材として取り上げられたのが、ジュール・ヴェルヌという流行作家の作品である。一八二八年生まれのヴェルヌが活躍した主な時期は、ほぼ第三共和政前期に重なる（処女出版は一八五一年、没年は一九〇五年）。ヴェルヌは穩健共和主義の立場に立つ作家という意味でも、とくに第三共和政期の多くの國民と政治的にも心性を共有していた。そうしたヴェルヌの作品を通して、「フランスの植民地拡張論者によって唱えられた帝國主義イデオロギーが、「帝國主義の時代」にどれほど草の根國民レベ

ルに浸透していたか」を探ろうというのが、本書の第一の目的となっている所以である。

またヴェルヌは民族解放を支持し、奴隷制廃止を唱えた「ヒューマニスト」でもある。他方、植民地支配そのものは肯定している。その矛盾する心性の解明が、本書第二の目的である。さらに第三共和政期は、フランスが飛躍的に植民地を拡張した時代であり、世界はまさに帝国主義の時代であった。しかし従来は、この時期には「帝国意識」はフランス一般国民の間にまだ根づいていなかった、という見解が有力であった。著者はこうした見方を再検討し、帝国意識変遷史に新たな頁を加えることを、第三の目的と設定している。

しかも本書が分析の対象とするのは、ヴェルヌの小説すべてであることを言い添えておこう。総数八〇篇を超える全作品を読破するという徹底した著者の姿勢に、敬意を表しておきたい。

では前置きはこれくらいにして、以下、内容の紹介に入ることとする。

二、本書の構成・内容と意義

本書の構成については、まず巻末の資料が充実していることを指摘しておこう。人名・地名・事項索引に加え、フランス植民地の地図、文献リスト。さらにヴェルヌの小説索引、ヴェルヌの全小説一覧のほか、主な小説のあらすじが約一一〇頁にわたって掲載されている。これらは資料としての価値も高い。

本論は大きく三部から成る。第一部「植民地大國再建の衝動」は、ヴェルヌが植民地の拡張を支持した理由の分析である。第一

章「貧しき人びとの夢」では、植民地進出の動機のみならず、社会帝国主義（植民地経営から経済的利益を得、それによって階級協調を実現するという立場）と、植民地から上がる経済的利益を強調する立場が取り上げられ、ヴェルヌが主に経済的側面を重視したことが示される。だがそれ以上にヴェルヌの作品に色濃く出ているのは、第二章「ひるがえる国旗」で示される愛国主義である。ヴェルヌは愛国主義を植民地拡張に直結させる見解をもっていた。とりわけ普仏戦争敗北後のフランスでは、ドイツに奪われたアルザス・ロレーヌを取り返せという「対独復讐熱」が沸騰するが、ヴェルヌ作品にもこれに基づく反ドイツの愛国主義が顕著に読み取れる。また当時はそれと並行して、反イギリスの愛国主義も広くみられた。ケルト系というヴェルヌの出身や英仏を取り巻く世界情勢との関連で、ヴェルヌの反英意識は一貫したものではないが、作品の大きな要素となっているようである。ヴェルヌを愛読した国民は、経済的動機からというよりは、植民地の存在でフランス国民としての自意識がくすぐられる政治的・心理的衝動から植民地を支持したと、著者は第一部を結論づけている。

ところで帝国主義イデオロギーには、主要な要素として「人種主義、自民族中心主義、あるいは西洋（ヨーロッパ）中心主義」などがある。こうした心性に基づいて、宗主国の国民と被植民者の間に差別化が行なわれる。第二部「フランス植民地帝國誌——自／他を覗る眼」では、被植民者を蔑視する姿勢がフランス国民にいかん浸透していたか、ヴェルヌの言説から考察されている。

第一章「表象のなかの他者——野蛮の発見」は、ヴェルヌの小説に登場するアフリカの黒人、イスラム教徒など、ヨーロッパ人

以外の人びとをめぐる記述の分析である。ニュアンスの差はあるが、いずれの場合にもすでに先行研究が明らかにしてきたステレオタイプ的な見方が現れており、ヴェルヌの人種差別意識と西洋中心主義が浮き彫りになっている。また一九世紀には人種差別に「科学的な」説明が施されるようになる（顔面角理論、骨相学など）が、ヴェルヌもそうした傾向をまねがれてはいない。結果としてヴェルヌは、一般庶民に差別的な自然人類学理論を通俗化して伝達する役割を果たした、という。

第二章「自意識としてのフランス人」では、被植民者をみるヴェルヌのまなざしのなかに、西洋人対非西洋人という対立軸だけではなく、フランス人対非西洋人という対立軸も含まれていたことが指摘される。それはフランス人を西洋人のなかで最優秀とする立場でもある。また「ヒューマニスト」ヴェルヌに反ユダヤ主義的な傾向が強かったという指摘も、看過できない点であろう。第二部の結論として著者は、ヴェルヌは植民地先住民とその社会、およびフランス人とその社会との間に明白な優劣をつけているのであり、こうした心性はこの時代、読者であるフランス国民にも深く浸透していた、と述べている。

さて、第三部のタイトルでもあり、検討の軸となっている「文明化の使命」論は、帝國主義イデオロギーの「ヒューマンな」論理である。植民地拡張の論理には、「負の側面」が色濃くある（宗主国の利益の主張、人種差別主義など）。それを覆い隠して植民地支配を正当化するために、こうした論理が必要とされたのである。では文明化とは、何をめざすものか。第一章「文明化の使命」論の三パージョン」では文明化を意味するものとして、穏健

共和主義・カトリシズム・物質文明があげられている。これらはそれぞれ、フランス革命の理念・ヨーロッパ文明の基盤・進歩した科学技術、と置きかえられる。本章では、まずこの三要素がいかにヴェルヌの作品に表れるかが示されている。なおヴェルヌ個人の思想や、ヴェルヌを世に出した編集者エッツェルなどとの関係が論じられるのは、主にこの章においてである。続く第二章「文明」の表象」では、以上三つの要素が「文明化の使命」論とどのように関連づけられているかが検討される。

第三章「負の植民地支配を前にして」では、ヴェルヌが負の部分をもつ植民地支配をフランス以外の国に還元し、フランスによる植民地支配の負の側面を批判的にみていないことが指摘される。それについて著者は、「文明化の使命」意識とフランス民族中心主義に妨げられたのだろうと推論している。文明化の使命を遂行するには武力行使すら容認し、文明化による「遅れた」先住民社会の消滅は進歩の必然の結果であるとするヴェルヌの姿は、従来のヴェルヌ像に異なる陰影をつけ加えるであろう。

以上、全ヴェルヌ作品の分析の結論は、冒頭に設定した三つの目的に沿って述べられる。まず、植民地拡張論者の主張する帝國主義のイデオロギーは、人種主義・自民族中心主義・西洋中心主義を基軸に、民衆レベルにもかなり浸透していた。次に、ヒューマニストであったヴェルヌが植民地支配の負の部分を見問視しない背景には、「文明化の使命」論という「ヒューマンな」正当化の論理があった。最後に、帝國意識の絶頂期は本書が対象とした帝國主義の時代でないといえ、帝國意識を構成する要素の多くはすでに国民のあいだで共有されていた。第三点は、従来の説を修

正するものとして指摘されている。

本書のように視点を転換してみると、単に冒険小説家と位置づけられない側面が浮き彫りになったことに気づく。ヴェルヌを主にSF作家として読んできたわれわれ日本人には、異なるヴェルヌ像がまざまざとみせつけられたといったところであろう。

ここで評者なりに、本書の意義を二点指摘しておきたい。第一に、わが国におけるフランス植民地をめぐる研究は、いくつかの優れた研究を除けば、政治史・経済史からの検証もいまだ十分であるとは言えない。しかし他方、歴史学において社会史的アプローチが進むなかで、研究のまだ少ないフランス植民地研究に、一流作家の全作品を分析するという手法を用いた文化の視座を導入したことは、植民地研究史の面からも評価される点である。

第二にヴェルヌ研究自体にも、新しい領野を開いたことである。当然であるが作家としてのヴェルヌは、これまでは文学研究の対象とされてきた。確かに、主に空想科学小説、あるいは冒険小説として読まれてきたヴェルヌのなかに、近年では西欧の自己中心的な視線を見抜く論者もいる。しかし本書はそうした点を全面的に主題とし、ヴェルヌの作品群を帝国史あるいは植民地主義の歴史の舞台へと移して、言説の背後にある心性を読み取ったものである。ヴェルヌ研究において本書が画期的である所以である。

なおこれに付随して言えば、偏見に満ちたステレオタイプ化あるいは差別化は、いつの時代でもどの分野でも行なわれている。性差別もその一つである。近年、小説を女性の視点から読み直す作業が進みつつある。文学作品を異なる視覚から読み替えるという点において、本書はそうした女性史の新しい研究動向と軌を一

にするものでもあり、積極的に評価したい。

三、いくつかの考察

さて、こうした本書の意義とは別に、いくつか疑問点、あるいは要望がないわけではない。それを述べるに先立って、誤りを二つ指摘しておく。地理の説明で「エジプト支配や、その東方のマグレブ地方」とあるが、これは「西方」の誤りであろう(四五頁)。またドレフュス事件への対応で、ヴェルヌが反ドレフュス派であったのに対し、息子のミシエルはドレフュスの冤罪を確信していたというが、それに続く記述では「ミシエルのような反ドレフュス派ですら」とある(一九四頁)。些細なことではあるが、惜しまれる。

では全体にかかわる側面について、大きく四点にまとめていきたい。

第一に、フランスにおけるヴェルヌの研究史についてである。フランスでの研究はもちろん盛んで、その主な部分は本書巻末にも列挙されている。そうした多くの研究のなかにおいても本書が目すべき位置を占めることは言うまでもないが、なお若干の整理された言及が欲しかった。たとえばフランスにおけるインドシナ研究を代表する一人にジャン・シエノーがいるが、彼には『ジュール・ヴェルヌを政治から読む』という著作がある。ヴェルヌにはインドシナを舞台とした小説がないので、本書は分析の対象にインドシナを入れていない。しかし、ヴェルヌが取り上げなかったインドシナを専門とするシエノーがいかなる指摘をしているのか、本書と重なる部分があるのか、あるいはシエノーの分析と

いえども、旧来の枠組を抜けていないのか。評者の知りたかったところである。

第二に、ヴェルヌは何者か、という点である。もちろん本書でもヴェルヌ個人について、とくに第三部第一章で描かれているのは、指摘した通りである。しかし読み終わって、なぜヴェルヌという人物がこうした小説を量産したのか、という点がどうしても残る。ヴェルヌの叙述からは、帝国主義のイデオロギーが種々の形態で読み取れた（対独・対英の愛国主義、人種論、文明化の使命、等々）。これらは学校教育を軸とした研究でもすでに現れているテーマであり、ヴェルヌの主張もまさに時代精神に合致したものとと言える。^⑦しかし、ヴェルヌが単に時代に追随していたとするのも適切ではあるまい。むしろヴェルヌは帝国主義の時代に先駆けて、海外にこれだけ飛翔していく物語を生み出している。

ヴェルヌは何者か、という疑問はここから生じる。本書にもヴェルヌがかつて植民地との砂糖貿易で栄えたナントの出身であることは述べてある。しかし、母方の父祖には船乗りや船主がいたことや、ヴェルヌの少年時代の愛読書が『ロビンソン・クルーソー』であったという知識を得ることが、なにがしかの手掛かりになると思うのは、短絡であろうか。一作家の思想や人格の形成となった要因を、家系や家庭環境にのみ還元するのはもちろん避けるべきであるし、これらにあえて触れなかった著者の意図は別にある。とはいえヴェルヌの作品を扱う以上、作家自身についてもう少し情報が欲しかった。

こうした点からすると、植民地の拡張に多大の貢献をした地理学協会の中央委員を務めたヴェルヌについて、同協会に入会した

理由を主に地理上の情報を得るためだとする見解（八頁）には、再考の余地があるようにも思われる。アフリカ大陸に関心をもつヴェルヌを、はつきりと帝国主義の支持者とみなす研究者もいる。^⑧一流行作家とはいえ、「無意識のうちに」イデオログとしての役割を果たしたのではないかと考えさせられるのは、評者だけだろうか。なお日本もアフリカ領有をめざし海外侵略の道を歩むべきだとする主張を示唆する政治小説が明治期に書かれているが、ここにデフォーやヴェルヌの小説が立案や構想の面で感化をおよぼしたと認める論考もあることを、指摘しておく。^⑨

第三に、ヴェルヌの小説を通して帝国意識の浸透度を読むという本書第三の目的に沿って、いま少し考えておきたい。人種論やヨーロッパ中心主義、あるいは「ヒューマンな」「文明化の使命」論など、個々の心性が一定程度草の根レベルに根づいていたことに異議を唱えるつもりはない。それを前提に、なお二つの問題が残るように思う。

まずヴェルヌがどう読まれていたか、という点である。ヴェルヌの作品が多くの読者を得たのは確かだが、個々の作品をみれば帝国主義の心性が濃厚なものとそうではないもの、よく読まれたものとそうではないものと、落差は当然であろう。本書ではそうした「温度差」を捨象して、すべてを同列に扱っている。また、植民地拡張に関する記述がどう受け取られるのかという問題もある。読者はヴェルヌの小説に、植民地を称揚する内容を求めたものではあるまい。物語の面白さの陰に、植民地をめぐる記述が薄い印象しか残さない場合もあろう。そこに「無意識の帝国意識」が読めると結論するのか、あるいは単に物語の展開そのものを好んだと

みるのか。評者としては「イデオログ」としてのヴェルヌ像に関心があるが、同じ人種差別一つを取っても、「劣等人種に汚染される」という恐怖から、植民地化に反対する主張もあったのだ。以上は小説を素材とするさいにつねに付随する性質の問題であらうが、評者としては改めて心性史の微妙な側面について考えさせられた。

次に帝国意識という言葉の含む内容についてである。先に触れた木畑氏の『支配の代償』では、帝国意識の一要素として「帝国の一体性」を重視する姿勢も指摘されている（同書、二七五―六頁）。フランス史では、「帝国の一体性」はいつのころから認識され、ヴェルヌの作品にはそれがどう反映されているのか。広く帝国主義文化を検討しようとする著者の意図からすれば細かいことにも思われるが、「帝国」意識という以上この点が気になった。とくにフランスにおいて帝国主義時代の初期は、第三共和政政府がフランス人としての「国民意識」の醸成を図った時期に符合している。裏を返せばこのことは、当時のフランスには十分な「国民意識」がいまだ欠如していたことを示している。もちろんそのなかでも、すでに植民地の宣伝はさまざまな媒体を通じて行なわれていった。いわば「フランス国民意識」と「帝国国民意識」が、同時並行的に創設されようとしていた時代だと言えるだろう。そして結果的には、植民地の現実的な拡張や国際情勢の変化を背景に「帝国の一体性」という意識は急速に培われ、フランス国民がその「中心」にあるという、まさに「帝国意識」の根本的概念が根をおろしていったと考えられる。

とはいえ「フランス植民地帝国」という言葉自体、一八八〇年

代以降の急速な領土拡張の結果、一八九〇年から使われ始めるにすぎない。言葉の不在は実態がないことと同義ではないが、やはり「帝国の一体性」という観点からの分析も、帝国意識の変遷史を深める上で要請されていく課題ではあるまいか。その意味からも、必ずしも年代順に追うことが適切ではないが、いわゆる「フランス植民地帝国」形成以前の一九世紀半ばから小説家として活躍していたヴェルヌの作品をすべて同じ重さで扱うことに、やや違和感を覚えたことを指摘しておきたい。

四、日本人としてヴェルヌを読む

第四に、本書「おわりに」には「日本人としてヴェルヌを読む」という副題がある。著者はヨーロッパ系フランス人の差別意識は、日本人という帰属意識をもつ人間が日本以外のアジアに対して持つ差別意識と、多くの共通項があると述べている（三〇〇頁）。

フランスの「文明化の使命」論は、日本では大東亜共栄圏構想であった（一九八頁）というわけだ。しかしこうしたタイトルを掲げる以上、ヴェルヌが日本をどう描いているか、あるいは日本人がこれまでどのようにヴェルヌの小説を受容してきたか、という点にまで踏み込んだ検討が必要であらう。それが日本人の異文化に対するまなざし、あるいは心性をみる手がかりになると考えられるからだ。

とりわけ注意したいのは、ヴェルヌが日本でも大きな人気を博したということは、作品に表れる人種差別主義やヨーロッパ中心主義が、ある程度はそのまま受容されたことを意味しているように思える点である。もちろん、評者自身の指摘した作品の読まれ

方という問題もある。とはいえ明治以後の日本は、「進歩した地域」としてのヨーロッパを目標とし、まさに脱亜入欧を掲げて「近代化」ヨーロッパ「文明化」に一路邁進してきた。当時からそうした思想に批判的な人びとはいたわけだが、その一方で「進んだ」ヨーロッパのもつ「遅れた」地域への差別意識や優越意識を、ヨーロッパ人と同じレベルに立って共有することにさしたる疑問を感じなかった日本人も、少なくはなかったであろう。

本書の分析対象はフランス植民地であり、日本は本書では取り上げられていないが、『八〇日間世界一周』には横浜が舞台として登場している。ごく大まかに言えば、その記述は主に日本の風俗の紹介であり、異文化に対する好奇心に満ちたまなざしである（田辺貞之助訳、集英社、一九六七年版、一五二―一六五頁）。それはたとえアフリカの土地や人への視線とは、基本的に異なっている。そうしたことはむしろ、日本人読者が自らヨーロッパ人の立場に立って、ヴェルヌの小説を読むことを容易にしたと考えられる。いうなれば日本人読者の多くは、たやすくヨーロッパ系の登場人物に自己同一化できなかったのではないか。日本が西欧の文物を取り入れることで「文明開化」を唱えていたことを考えれば、「シナや日本という途方もない国をあとにして、文明の世界へ帰って行くのだ」（同、一六五頁）という登場人物の言葉が、日本で必ずしも侮蔑的に感じられたとは言えまい。それはひいては「名譽白人」という呼称をありがたがる日本人の心性につながるものであり、そうした姿勢こそが、日本以外のアジア人蔑視を生み出す土壌になったのではないだろうか。

以上を考え合わせれば、非ヨーロッパ世界の日本でもヴェルヌ

作品を一面的にしか読んでこなかったこと自体に大きな問題があるのは否定できない。このような「見落とし」は、フランスのみならず、今後日本人の「帝國意識」をみる上で改めて検討すべき課題となるはずである。その意味で、日本人としてヴェルヌを読むことには「人のふりみて我がふり……」（三〇〇頁）以上のものがあると思われる。

このように本書は、全ヴェルヌ作品の分析を通じてわれわれ日本人が無自覚なままに抱いていた差別的なまなざし、あるいは卑屈さに注意を促す役割を果たした。今後の植民地研究においても、本書は重要な位置を占めるであろう。

最後になるが、一九九五年一月一〇日にイギリス帝國史研究会で本書の合評会があった。評者は出席できなかった上、それをまとめたものにも目を通す機会を得ていない。したがって思わぬ読み違いなどがあるかもしれない。あらかじめご了承ください。ば幸いです。

- ① 『フランス便り』フランス大使館、一九九五年五月、二〇頁。
- ② 富田仁「ジュール・ヴェルヌと日本」林書房、一九八四年、七頁。
- ③ たとえば服部春彦『フランス近代貿易の生成と展開』ミネルヴァ書房、一九九二年、権上康男『フランス帝國主義とアジア―インドシナ銀行史研究―』東京大学出版会、一九八四年など。
- ④ 古屋健三「光と時間」『ユリイカ』一九九七年、五月号、一〇五頁。
- ⑤ たとえば江種満子・関礼子他『男性作家を読む』新曜社、一九九四年、など。

⑥ Jean Chesneaux, *Une lecture politique de Jules Verne*, Paris, Maspero, 1971. また Marie-Hélène Huet, *L'histoire des Voyages*

extrariminaires: essai sur l'oeuvre de Jules Verne, Paris, Minard, 1973 のように、ウェルヌ作品にみられる国民概念や国民感情(「ナショナルリテ」)を、年代順に分析した研究書もある。

- ⑦ 教育(教科書)にみられる植民地問題について、Dominique Mangueneau, *Les livres d'école de la République 1870-1914*, Paris, Le Sycomore, 1979. また拙稿「フランスの歴史教科書にみる植民地問題」『蜜楽史苑』第三五号、一九九〇年二月。
- ⑧ 和市保彦「夢想家ウェルヌ——その生涯と作品」前掲『ユリイカ』八四頁。

⑨ William B. Cohen, *Les Noirs dans le regard des Blancs: 1510-1880* (traduit de l'anglais), Paris, Gallimard, 1981, p. 361.

⑩ 富田前掲書「第二部第一章「矢野龍溪『浮城物語』」。

⑪ Cohen, *op. cit.*, p. 360.

⑫ Jean Martin, *Lexique de la colonisation française*, Paris, Dalloz, 1988, p. 146.

(A5版 四二〇二十六頁 一九九五年七月 山川出版社 五三〇頁)

(鈴鹿国際大学講師)